平10年5月20日第3種郵便物認可

講読希望の方は受付まで

浄土

monthly
JŌDO

1999

5

May

法然上人鑽仰会

国際電話は00 41、市外電話は00 88でテレコムしよう。

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の、心の故郷を紀行する。

目黒

祐天寺

祐天寺の日常的な管理と、行事手伝いをされる出入りの職会の方々、中央は第二十三世巖谷勝正住職。下は仁王門と本堂

「眼光爛々」といわれた面影が残る本尊の祐天上人像

本尊は祐天上人木像

祐天上人直筆の名号。祐天名号と呼ばれる

境内には祐天上人を有名にしたかさねの塚がある

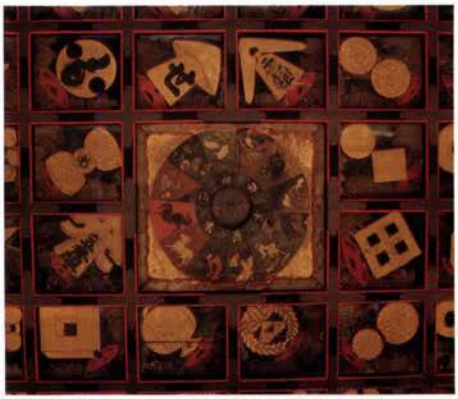
目黒 祐天寺

笑顔が優しい住職は四十歳の若さだ

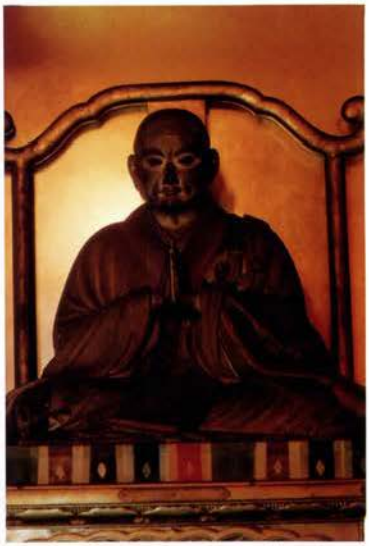
みたま祭りと呼ばれる盆おどりは祐天寺の大きな行事のひとつ

本堂は間口九間。増築している奥行きは十間を超える

今年遷座二百年を迎える地蔵尊



地蔵尊が祀られている地蔵堂の天井
には江戸火消しの纏の絵柄が並ぶ



祐天寺を開山した祐天上人の高弟、祐海上人の木像

祐天寺の研究室。四人の研究員が
日々課題に取り組んでいる

撮影・タカオカ邦彦

浄土

1999/5月号　目　次

カラーグラビア 寺院紀行「目黒　祐天寺」……写真＝タカオカ邦彦　3
祐天上人のこと……巌谷勝正　8
寺院紀行「目黒　祐天寺」……真山　剛　16
法然上人をめぐる人々（二）……石丸晶子　24
表紙の言葉……三浦功大　31
御法語に聴く……林田康順　32
東海道五十三次を歩いて（二）……原田　功　36
仏教相談……大室了晧　44
コラム　仏教歳時記……48
Ｊフォーラム……49
浄土誌上句会……50
まちがいさがし・事務局便り……53
編集後記……54

表紙題字＝浄土門主　中村康隆猊下
表紙撮影＝三浦功大
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

祐天上人のこと

祐天寺住職
巖谷勝正

美しい女性が恋人与右衛門を追って花道からやって来る。名を累という。木下川堤で与右衛門に追いつき、心中を迫る。その時、二人の目の前に卒塔婆に乗った髑髏が流れてくる。与右衛門は卒塔婆に書かれていた「俗名助」という名前に覚えがあった。昔自分の手で殺めた男で、実は累の父である。与右衛門は恐れをなし、卒塔婆を折って髑髏を鎌で割った。その途端、累はもがき苦しみ美しかった顔もただれ醜い形相となって与右衛門に取りすがる。与右衛門は累を鎌で斬りつけ、花道を逃げていくが、累の怨念によって再び引き戻されるのであった。

これは、歌舞伎「色彩間苅豆」のあらすじです。ここに登場する累こそ祐天上人の僧侶としての歩みに大きな影響を与えた女性の名前なのです。このように歌舞伎に取り上げられ、現代まで日本の文化に深く入り込んだ祐天上人とはどのようなお坊さんだったのでしょうか。

まずは祐天上人の略歴から紹介しましょう。上人は、寛永十四（一六三七）年に現在の福島県いわき市四倉町で生まれました。どちらかというと海岸線に近いところです。姓は新妻と言いますが、その家系は身内に多くの出家者を出し、大変信仰熱心な一族であったようです。いわきには、浄土宗名越派の総本山専称寺があり、また民間信仰として十九夜尊や二十三夜尊なども盛んなところですから古くから信心深い土地柄であったようです。

十二歳の時、増上寺塔頭寿光院にいた叔父を頼って増上寺に入寺することになりました。叔父は上人の才能を見て、すぐに袋谷という学寮の寮主であった豪傑檀通上人の弟子とし

ました。やがて檀通上人は学頭となり、群馬県の館林善導寺へ晋山することが決まりました。ここで、上人は師匠について行くか、増上寺に残って学問を続けるかという決断を迫られたのでした。当時、増上寺は大檀林といって、関東に十八あった檀林（僧侶養成の学問所）の筆頭でした。その増上寺を一度出ると再び増上寺に戻って学問を続けることはその定員などの関係で非常に難しい状況にありました。しかし、上人は一途に師匠についていく道を選び、檀通上人が亡くなるまで随身したのです。

檀通上人は善導寺から飯沼（茨城県水海道市）に出世され、最後は鎌倉の光明寺まで上られました。上人は十九歳から三十八歳という時期を檀通上人について過ごされたのです。檀通上人が遷化されると、なんとか増上寺に戻る道が開かれ、再び学問を進めることになりました。

学問を究め今度は後進を指導する立場となり、いよいよ学頭になって檀通上人と同じように檀林のお寺の住職になろうかという時期に、上人はそのような栄誉を望まず、本所牛島（墨田区）で隠遁生活を送ることになりました。上人五十歳でした。そこでは、ひたすら念仏生活を続け、南無阿弥陀仏という六字の名号を書写し、請われるまま江戸の庶民に分け与えていたのです。

すると、徐々に上人の名号の利益が伝えられ、また上人を題材とした本が出版されるなど、その名声が広まっていったのです。時代は元禄、綱吉公の治世でした。当時現世利益を求めた綱吉公の生母桂昌院の耳に上人のことが伝えられ、とうとう増上寺での法門に召

しだされたのでした。

桂昌院は、上人から浄土宗の話や家康公の守護黒本尊のいわれなどを毎年のようにお聞きになり、上人へ傾倒していきました。そして桂昌院の進言により上人は綱吉公の台命を蒙り、元禄十二年六十三歳にして千葉市にある檀林生実大巌寺の住職を拝命したのです。

当時、檀林の住職は入札制（いわゆる選挙）となっており、簡単にはなれませんでしたが、異例の出世となったのです。その後、随身として住んだことのある飯沼弘経寺、次に小石川伝通院そして正徳元年七十五歳の時、家宣公の台命により増上寺第三十六世となり、即日大僧正に任ぜられました。正徳四年隠居後、享保三（一七一八）年七月十五日八十二歳で遷化されました。

駆け足で生い立ちを追いかけましたが、これだけでは、上人が名僧といわれた理由はわからないでしょう。

今でも文学者高田衛氏が「江戸の悪霊祓い師」と評する上人の姿はどこから来たのでしょうか。

実は、上人が増上寺を去り隠遁生活をしていた元禄三年一冊の版本が出回ったのがきっかけでした。その本の題名を『死霊解脱物語聞書』といいます。その本の内容が、冒頭の歌舞伎の題材にもなっている一連の累物の原型なのです。

その事件は、上人が檀通上人に随身していた飯沼で起こりました。一人の村娘菊が半狂乱となり、様々なことを口走るようになったのが発端でした。医者も少ない当時のこと、

祐天寺本尊は祐天上人木像

祐天寺本堂横の絵を書いた大絵馬

このような相談は弘経寺のお坊さんへ持ちかけられたのでしょう。たまたま上人が出かけていき、念仏によってその菊を済ったのです。

実は、菊が狂乱したのは、その父与右衛門が殺した先妻の累の霊が取り憑いたというのです。また、累の母の連れ子だった助も非業の死を遂げており、済いを求めて取り憑きます。それを、村人たちが心を合わせ念仏することによって、得度させ菊を助けたのでした。この時の話を取材した作者が、念仏の説教譚として出版したのがこの本なのです。

ことの真偽はともかく、この本は上人が増上寺の大僧正となった時に、再版され広く読まれたのでした。上人の遷化後、この本が元となって、多くの伝記が編纂され、まさに悪霊祓い師としての上人が描かれ、怪談物として浄瑠璃、歌舞伎、講談、舞踊などに取り込まれていったのです。

それでは、浄土宗の僧侶としての上人像はどうなっているのでしょうか。増上寺の大僧正にまでなったお坊さんが実は悪霊祓い師だったというのでは、これまで築き上げられた浄土宗の教義や歴史はどうなるのでしょう。

実は、上人の伝記には、二つの系統があり、一方は今述べたような伝記ですが、もう一つ上人の弟子が上人の遺徳を書きとどめようと編んだ伝記の系統があるのです。これは、増上寺の寺誌である『三縁山志』にまとめられていった流れの伝記です。

上人は生涯、南という字を丸く書く独自の名号を書写し続けていたためか、著作物がほとんど存在しません。しかし、その思想や人となりはその弟子が著した書物から類推する

ことができます。

まず、上人の直弟子で後に祐天寺を起立した祐海の著した『祐天大僧正利益記』という版本があります。浄土宗の立場から名号の利益譚を集めたものです。これによると、牛島時代から遷化されるまでの上人と庶民の密接な関係が読みとれます。

これには、当時難産で苦しんでいる女性の臨終に立ち会い、家族が念仏して助かった話や、名号を飲ませて命拾いをしたとか、海が荒れた時に、漁師が名号を海に投げ入れたところ嵐が収まり助かった等々、様々な当時の命がけの仕事や医療活動の中、命終を思わせる時、せめて浄土へ往生できるようにと名号を書き与えたり、出かけていき十念を授けた姿があったのです。自然と牛島の草庵に住む祐天という僧の名声がどんどん高まっていったのです。この姿勢は檀林主となってからも何ら変わることはありませんでした。『利益記』以外にも、伝通院に住したとき、村人に頼まれて地蔵堂に出かけていって十念を授けたのが縁となり、村人が寺院として復興させた話や護国寺で嵯峨二尊院の釈迦如来がご開帳の時、どうしてもご本尊が霧につつまれているようで明らかに見ることができないという首切り役人が上人を訪ねた話なども伝えられています。

このようなことから桂昌院が上人に興味を持たれたのも想像できるのではないでしょうか。桂昌院は最初、上人から「念仏の有り難き儀」を聞かれ、また「延年転寿」「現世無比楽」など教義にかかわる法談をしながらも、「現当二世の利益の念仏」や「念仏は下人の唱物と申すあやまりの事」という現実的な話も交わしています。このような法談を繰り返す

内に桂昌院の信仰は上人に傾き、その現れとして、臨終の時に、上人が呼ばれ桂昌院の最後の息に合わせて念仏を唱えました。そして増上寺に葬られたこともその信仰の故とみることができるでしょう。

儒教の大家として知られる綱吉公との法門では、弥陀の名号の験益が知れ渡っているが、その真偽はどうか、鎮護国家の法が他宗にはあるが浄土宗にないのはなぜか、家康公は深く念仏門に帰依し、戦場でもその利益があったと伝えられ、それによって永く天下が安らかになったというが、その理由を聞きたいとの問答が繰り広げられました。

上人は、これらの問いに明快に答え綱吉公を信服させたといいます。もしこの法門に失敗していたら、今の浄土宗はなかったかもしれません。天下の大将軍と対峙し、事なく乗り切ったのでした。綱吉公自身の信仰は変わりませんでしたが、続く家宣公やその周辺の徳川家の人々は浄土の信仰を受け継ぎ、深く上人に帰依したのでした。

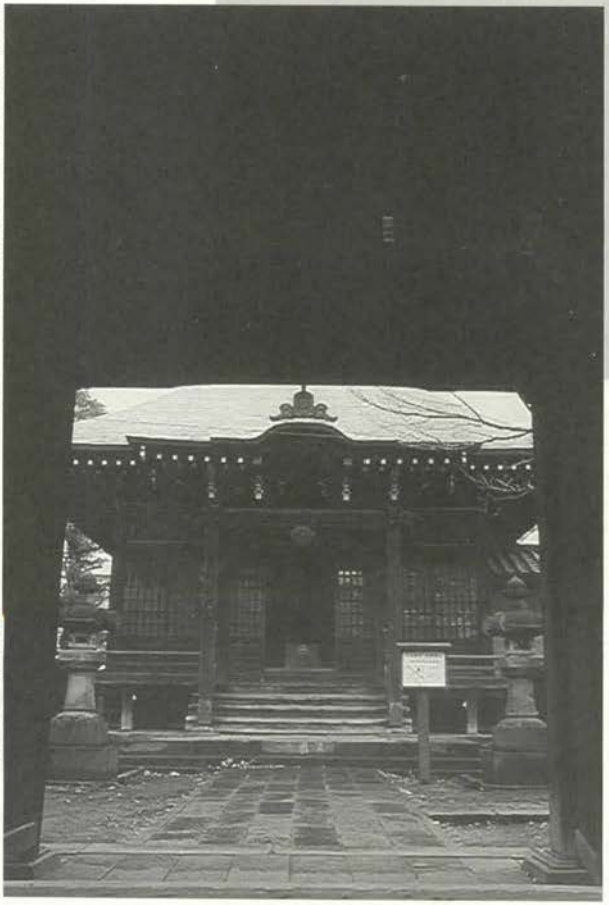
また、当時の知恩院法親王を介して東山天皇の女院、承秋門院らも上人から血脈を受けています。

このように、上人の徳名は、将軍家、皇族そして庶民のあらゆる人々の間に広がっていきました。

その遺徳は弟子によって引き継がれ将軍家の特別の計らいで上人の名を冠した不断念仏道場として祐天寺が建立されたのでした。

寺院紀行

目黒 祐天寺



平成十一年五月十六日に遷座式が行われる地蔵尊。この生まれ変わりが祐天上人といわれる

撮影／タカオカ邦彦
文／真山　剛

寛永十四年、西暦一六三七年、奥州磐城の四倉、現在の福島県いわき市四倉町仁井田に一人の男の子が生まれた。月日は四月八日、時まさに釈尊降誕の日。

農家に生まれたその子は幼くして自ら僧侶になることを発心、十二歳で芝増上寺山内池徳院に入る。そして剃髪得度、祐天と命ぜられた。

出家してからの祐天は、数えの八十二歳で麻布龍土の禅室で西化、亡くなるまで実に多くの足跡を残している。

修行時代、お経を全然覚えられなかった祐天が夢告によって成田山新勝寺を訪れ、不動明王と対面、その剣を飲み込んで経文が覚えられるようになったと、これはあくまで伝説だが、この話に始まって、醜い容姿がかさなった娘の霊を祐天上人が祓ったかさねの物語。あるいは隠居していた牛島の地での不断念仏や、祐天名号の功徳話。奈良の大仏への大柱寄進や鎌倉の大仏への庫裡復興資金の寄進。そして当時の浄土宗寺院でも別格であった檀林寺院、生実大巌寺、飯沼弘経寺、小石川伝通院、そして芝増上寺の住職歴任。

また、五代将軍綱吉への諫言や桂昌院（綱吉の母で家光の側室）や大奥夫人からの帰依と、細かく書いたら、上下巻の書籍になってしまう人物である。

結局、八代将軍吉宗の「現今真の僧侶というべき者は祐天上人で

祐天寺中興、第六世祐全上人木像

あろう」という言葉に集約せざるを得ないのだが、まさにまれに見る高僧、いや傑僧である。

振り返れば、この寺院紀行で訪れた寺にも祐天上人の足跡がいくつも残っていた。庶民から将軍、そして大奥夫人まで、その帰依する層は幅広い。人間をその職業や地位などで見ず、誰彼隔てなく親交を持つのは、まさに釈尊や法然上人と相通じるところがある。この分け隔てないつき合いは簡単なようでなかなかできない。だが、これこそまさに仏法の基本なのであろう。

さて、祐天上人亡き後、その「不断念仏道場を建立」の意志を継いだのが、おいの祐海上人である。祐海上人は師の祐天上人が息を引き取るや否や仏師法橋岩見を呼び、座らせた姿を彫らせたことから始まり、新寺建立が禁じられている中、現在の祐天寺の地にあった善久院に師の名前を残した善久院祐天寺を建立した。そして後に将軍から祐天寺の公称許可や「内礼」という寺格を授かったのである。いわば実際の開山上人である。しかし祐海上人は開山を祐天上人とし自らは第二世となっている。

さらに祐海上人は第五世の住職を再任している。

続く第六世が祐天寺中興の祖と言われ、七堂伽藍を整備した祐全上人である。今も本尊祐天上人像に向かって右に祐海上人、左に祐全上人の尊像が祀られているが、これは二人の上人が祐天寺の基盤

「鐶一」と呼ばれる祐天寺寺紋、その由来は定かでない

を築いたことを物語っている。

こうして築かれた祐天寺はその名を地名や駅名に使われるほど、地元との関係が深い。祐天寺は目黒区中目黒にあるが、この目黒区には目黒不動の通称で親しまれる天台宗龍泉寺、酉の市で有名な大鳥神社がある。どちらも由緒ある寺社でともに平安時代、西暦八百年代始めの創建である。こうした古刹や神社に比べたら享保三（一七一八）年起立の祐天寺の歴史は古いものではない。にも関わらず地名や駅名に名がついている。

もちろん広大な寺領もその一因だが、いまでも九つある祐天講を始め、幼稚園、ボーイスカウト、ガールスカウト、文化教室といった幅広い活動で地元の人たちと親密な関係を保ち続けていること。そして、やはり本尊として祀られている祐天上人の人気に他ならない。巻頭カラーの扉に住職と写っている方々もやはり祐天寺出入職会の方々で、地元の石屋さんや植木屋さん、瓦屋さんなどだが、撮影と聞けば朝早くから集まってくれるのである。祐天寺は地域の交流の場であり、信仰の寄り所になっている。

こうした名刹祐天寺に新しい住職が晋山（住職の就位式）される事となった。第二十三世巌谷勝正住職である。巌谷住職は第二十世である父勝雄住職の三男で、勝雄住職の弟であり第二十二世だった本多正雄前住職に続く住職である。巌谷住職は現在四十歳という若

目黒不動の名で親しまれる龍泉寺

11月の酉の市で賑わう大鳥神社

さである。

すでに他界している父勝雄元住職が第二十世の法灯を継いだのが三十歳の時だったので、それには及ばないものの、むしろ一般社会に充分に触れてからの住職就任だけに戸惑いも少ないようだ。

昭和三十四年、祐天寺に五人兄弟の末っ子の三男として生まれた巌谷住職は地元の小学校から浄土宗の宗門校である芝学園で中高時代を過ごした後、国立宇都宮大学工学部に入学する。当時はまだ国立が一期校、二期校と分けられていた時代で一期は北海道大学、二期は宇都宮大学を受験したという。どちらも目黒の地からは遠い。というのも兄がいてお寺を継ぐ必要がなかったからで、そして割とワンマンだった父から離れて生活したかったこともあった。

さて、宇都宮大学では工業科学を学び大学院まで進んだ。そして卒業と同時に花王石鹸株式会社(現花王株式会社)に入社。三年間東京研究所の化粧品開発グループに籍を置いた後、花王アメリカのロサンゼルス研究所に移籍した。ソフィーナメイクアップ化粧品の開発が仕事である。ちなみにロス研究所の日本人は所長と巌谷住職だけだったという。

このアメリカの研究所で巌谷住職は第二十三世となって祐天寺の法灯を継ぐことを決意する。叔父が兄から住職を継いだ時から、やがて自分にという気持ちがあったからだろうか。お寺に入ることに

祐天寺幼稚園の園庭でボーイスカウト・ガールスカウトと日曜学校の子供たち

山門脇の[illegible]でキャンプ生活などの体験

抵抗はなかったという。

状況が変われば、それこそ仏飯で育ったことが自然と思い出される。これも人生かと、科学者から僧侶への転身を決めた。

それに当時の花王の丸田社長は業界では有名な長期政権の社長だったが、その言葉の中に「世の中を清潔にする清浄行」であり「いただくのは布施」というフレーズがあった。また個人として十七条憲法を研究するなど仏教的な考え方が浸透していたことも影響したに違いない。

平成元年四月、帰国し大正大学へ編入入学する。後を継ぐのに出した条件は大学へ行くことだった。祐天寺を継ぐ以上、仏教を知り僧侶としての基礎をしっかり作っておきたかったからという。

大正大学では卒業後、大学院に行き、修士、博士課程とさらに浄土学を六年学んだ。

この話を聞き驚いたのだが、巌谷住職は宇都宮も含めると、合計十四年間大学へ通っていたのである。勉強好き、いや研究好きなのである。そこで化学と仏教に通じるものがあるかを聞いてみた。

「化学でも仏教でもそのアプローチの仕方は大変論理的だということがわかりました。そしてなによりも共通しているのは、その目的が真理を知ることにあるということです」

片方とか、片側しか知らないと、よく理解できないことはこの世

五代将軍の息女竹姫寄進の阿弥陀堂と阿弥陀仏

には多い。住職の言う具体的なことはわからないが、概念としての仏教は意外と論理的なのかもしれない。確かに仏教が自然科学などと相通ずるという話はしばしば耳にする。

さて、平成元年から大学に通いつつ寺の仕事に関わってきた巖谷住職だが、まだ副住職のころから先頭に立ってやってきたことがある。祐天寺研究室の設立だ。

祐天寺にもともとあった出版部を研究室という名前に変えたものだが、なんと四人の専属の研究員がいる。研究室の目的は祐天上人と祐天寺の資料収集と研究で、祐天上人を通じて江戸文化の研究にもなるという。しかし四人という研究員の人数は寺としては大所帯だ。研究者だった住職ならではの配慮が大いに働いている。

さて、この他では檀信徒に隔月に届く寺報『祐天ファミリー』の発行だ。そのタイトルのファミリーは花王時代の花王ファミリーからアイデアを得たものだという。

そしてお寺は地域のみなさんと一緒にあるものという考え方から新聞形式にしたという。内容はお寺の行事や勤めているお坊さんの紹介、檀信徒の訃報、そして持ち回りで書く法話。研究室からのたよりなどだ。

こうした地域とのつながりの次に住職が腐心しているのが、祐天寺に関わる多種多様な組織や行事などのシステム化だ。

祐天寺商店街(右)と東急東横線の祐天寺駅

宗教法人祐天寺にはしっかりした組織がある。総務部、法務部、地所部、幼稚園を軸にして、たくさん残る寺宝の管理や文化教室の運営、教化、研究などのいくつもの課に分かれている。もちろん外部団体ともしっかり連携している。文化財などに指定されている伽藍の管理もなかなか大変な仕事の上に、大きい寺だけに檀信徒も多く、しっかりしたシステムが必要だという。

さて、化粧品の研究者から一転、名刹の住職となっての目標を聞いてみた。

「生涯教育の場を提供すること。そして祐天上人の意志である不断念仏道場としての祐天寺を大切にしていくことです」

晋山式の翌日に地蔵堂の地蔵尊遷座二百年の記念法要が行われる。信州松本から遷座したこの地蔵尊だが、地蔵尊の生まれ変わりこそ祐天上人という。五月十五日、祐天上人から再び地蔵尊にもどり、きっと第二十三世の晋山式を微笑ましく見ていることだろう。

（ルポライター）

祐天上人の墓。遷化は一七一八年、享保三年

［書きおろし連載小説］

法然上人をめぐる人々
式子内親王の生涯

第二回　女院と法親王、式子を見舞う

石丸晶子

一

殷富門院亮子の糸毛の車と守覚法親王の檳榔毛の車が、前斎院御所式子内親王家の総門を入ったのは、時刻が午の刻（正午）にさしかかる頃であった。

糸毛の車には亮子のほかに側近の上臈女房二人が、檳榔毛の車には守覚のほかに側近の僧侶二人と侍童一人がそれぞれ同乗していた。

当時は一日二食がふつうであったから、午前に朝食、夕刻に夕食をとる他、特に昼食をとるということはない。

お忍びの見舞いとはいえ、身分上、二俩の牛車の前後にはそれぞれ数名の従者がしたがっていた。

表門には式子の後見である藤原公時とこの邸の家司である藤原定家が、前斎院御所の役人二人とともに出迎えていた。

そこを通りすぎ、ゆるゆると邸内に入った二俩の牛車は、やがてこの邸の召使たちが膝まづいて出迎えている中門を通過すると、黄葉が散りしいた広大な前庭をとおって寝殿に向かい、正面の階段で止まった。

階段の下には邸に仕える数人の下働きの女たちが、そして階段の上の簀子には女房松風が、平伏して迎えていた。

灰色の頭布をかぶり、同色の法衣をまとった亮子五十四歳。法親王の平常着である裘代姿の守覚五十一歳。

牛車から降りた二人の姿は、初冬の陽の下に静まった樹木多い邸内の風景に、しっとりと溶けこんでみえた。

真昼の陽ざしの下に降り立った女院と法親王が、それぞれ側近の女房と僧侶、侍童を伴い、ゆっくりと七段の階段を上がっていく。

「ご案内申し上げます」

簀子の松風は平伏していた顔をあげ、こう言上すると、立ち上がって簀子を進み、廂に

通じる妻戸のところで、再び平伏して二人を寝殿のなかに通した。

ここで、当時の邸宅である寝殿造りについてふれておこう。

寝殿造りとは、寝殿を中心にして構成される一構えの邸宅のことで、広さはふつう、一町四方約五千坪を基本にし、なかには冷泉院のように二町四方約二万坪という広大なものもあった。

この広大な邸宅を構成するものとしては、中心になる寝殿のほかには、その東西に位置して建てられた対屋、広い渡殿、廊、釣殿、泉殿、雑舎、車宿、総門（表門）、中門、築山、池、遣水、などなど。

寝殿というのは、いうまでもなく寝室の意味ではなく、邸宅の正殿という意味である。そしてこの寝殿は、敷地の北側中央に、南面して造られることになっていた。

その内部は、まず母屋とよばれる長方形の板敷きの空間の四周を、廂とよばれるやはり板敷きの広い廊が、廂、孫廂、と二重に取りかこみ、さらに外側を、現在のぬれ縁にあたる簀子が取りかこんでいる。

簀子は廊より一段低くなっているが、母屋と廂の間には、ふつう、高低の差はなく、母屋と廂は、両者の境に立って寝殿全体を支える何本かの丸柱によって区別される。

その広さは、母屋と廂を合わせて、約百坪の空間。貴族たちは、この広い板敷きの空間のあちこちに畳を置き、几帳や障子や屏風で仕切って生活するのである。

母屋の西北の一隅に畳二枚を置き、三方を几帳でかこんだ病床に、半身を起こした式子は脇息に身を支えられて姉と弟を待っていた。

その側らには、御匣殿と大納言局という、側近く仕えて式子の身のまわりの世話をする女房二人が、小袿の袖の下からわずかに見える手を床について、女院と法親王のお成りを

迎えていた。

二

廂と母屋の境いに日頃は垂れ下がっている簾が、この日ばかりは紫のひもで簗に高く巻きあげられ、晩秋の真昼の光が、うす明るく寝殿内部にさし込んでいた。

その光の中に式子を認めるや、

「おお、姉上」

と守覚は低くつぶやき、亮子のあとにつづいて枕辺に近よっていった。

亮子と守覚が、そこに用意された円座にすわると、二人が伴なってきた女房と僧侶たちも、廂にしつらえられた円座にすわった。

彼らの父後白河院の崩御にさいして際会して以来、姉弟とはいえ、三人がそろって顔を合わせることはなかった。

こみあげてくる感慨の中、亮子も守覚も、しばらくは声もなく式子をみつめるばかりである。

「そのように起きておられてよいのですか。われらに遠慮はいりませぬ。休んでくだされ。そのほうが、お話もしやすうございましょうぞ」

やがて亮子はそう声をかけると、彼女自身、手をかして式子を横にさせた。

「お会いしとうございました、姉上。父上の御葬送の折にお会いして以来、十年にも近くなります」

目にはなつかしさのこもる光をたたえて、守覚はいった。

まことにのう。御室の仰せられる通りじゃ。あなたの病気見舞いというのでなくては、われら姉弟三人、相会うて語りあうこともできぬ。口惜しうございますぞ」

亮子は嘆息すると、彼女自身に向かってつぶやくように、

「おお、今日は恨みごとをいいに参ったので

はありませぬ。許してくだされ。ただ、あなたばかりは、このわたくしとも御室とも、日ごろ交わろうとなさらぬゆえ、つい、恨みごとが先立ちました」

ことばを切ると、亮子はしばらく、やつれの目立つ式子をみつめていたが、

「具合はどうです。医師の見立てはいかがであろう。案じておりましたぞ」

「御心配をかけて申しわけありませぬ」

さすがになつかしさがこみあげてくる中で、式子はいった。亮子を見上げる目には涙が光っている。

そんな式子にしきりにうなづきながら、次いで亮子は顔を側らに控えている女房のほうに向けると、

「斎院さまの御具合はどうじゃ」

御匣殿（みくしげどの）が答えた。

「御脚の腫れに変りはありませぬ。されどここ数日、お熱も下がられ、ご気分がよいと仰せられて、食もお進みであられます。女院さまと法親王さまのお越しが伝えられてからのことでございます。お側にお仕えするわたくしども女房一同、さすが御姉弟の御仲と申しております」

「いかにものう」守覚はうなづいて。

「姉上、うれしうございますぞ。われら母を同じくするきょうだい六人。しかし、以仁はあのような生涯を送り、好子姉上も、妹休子も、亡くなりました。残るきょうだいはここにいる三人ばかり。一つの心で助け合っていきたいものでございます」

守覚のことばを亮子がひきとった。

「あなたもお聞き及びと思うけれど、先頃、わたくしは安井の御所（花園殿）に持仏堂を造りましてね。蓮華光院という名を御室につけて頂き、仁和寺諸院の一つにして頂いたのです。その落慶供養を三日前に執りおこなって頂いたのだけれど、後鳥羽上皇さまと宣陽

門院さまも御幸されましたよ。それはもう、荘厳盛大で、もちろん、九条家の兼実はじめ殿上人多数が、雲霞のごとく馳せ参じました。そのときふと思ったのです」

突然わきあがった涙を、法衣の袖から懐紙をとりだすと亮子は目にあてた。

「あなたとご一緒に、この荘厳な御供養を営みたかったと」

三

涙にくもる声で亮子はつづけた。

「もちろん、あなたは病床におられて法会に列することはできません。しかし、たとえお元気であっても、あなたは参列されますまい。それを思って——」

式子はそれに答えぬまま、黙って目を格子戸の彼方に向け、かきくどくような姉のことばを聞いている。亮子はさらにつづけて、

「それを思って、心底情けなくなったのです。上皇さま、宣陽門院さまはじめ並みいる殿上人たちをお迎えして、御室が心をこめてみ仏に勤仕しておられると申しますのに、日頃その御室をお助けしようともなさらず、わたくしたちと喜びを共にしようともされずに、あなただけが離れておられる」

「姉上」

なおもいい続けようとする亮子に、守覚が呼びかけた。

「そのことはもうよろしいではありませんか。斎院がお疲れになりましょうぞ」

この守覚のことばを合図にしたように、人々の間に沈黙が落ちた。にわかに、午後の静寂が寝殿の中に広がっていった。

その静寂の中で、守覚はしばらく、廂と簀子を区切る格子戸の彼方、色づいた葉をまだわづかに枝に残して見え隠れする木立のほうに視線をやっていたが、やがて意を決したように、式子に視線をおとすと、

「姉上」
と呼びかけた。
「御病床の姉上に心苦しいことでありますが、御病床にあればこそ、申し上げねばならないことがあります」
式子は顔を守覚に向けた。
「――仰せられませ。今日は気分がよいのです。それに――」
病に疲れた様子がやはりにじみでている式子の目に、ある表情が宿った。
「わたくしは助からないかもしれません。そんな予感がするのです。仰せられませ。今、伺わずして、いつ伺うことができましょう。疲れはいたしませぬ」
「そのおことば、うれしうございますぞ。されば申しますが」
守覚は手にした水晶の念珠を持ち直して、
「姉上には昨年よりこのかた御不例であると伺って参りましたが、癒らぬなどと心弱いことを仰せられる前に、御病気とあれば、何はさておき、種々なる修法を行わなければなりません。加持も祈禱もなさらぬゆえに、治る病いも治らぬことになるのです」
長く濃い眉毛に、深い憂いを漂わせて守覚はつづけた。
「でありますのに、姉上はいかなる修法も御祈りも拒まれているとか」
守覚は深く嘆息した。そして、
「いかにもこれは、ゆゆしいことと申さねばなりますまい。先頃は仁和寺より、真言の修法に通じた篤信の僧を加持のためにこちらの邸に遣わそうといたしましたのに、姉上はそれを辞退してしまわれた」
沈痛な声であった。
（つづく）

今月の表紙

蓮 LOTUS

5月

池の中に蓮華あり
大如車輪
青色には青光あり
黄色には黄光
赤色赤光
そして白色には白光ありて
微妙香潔なり
舎利弗よ
極楽国土には
かくの如くの
功徳荘厳が成就される
・
蓮華
この不可思議
たとえ七寶池八功徳水なくとも
小さな泥田に
咲く
美しく咲いて
いる

蓮の品種

ハスにはレンコンを取る「食用蓮」と、花を鑑賞する「鑑賞蓮」に大別されます。レンコンは蓮田で栽培されていますが、鑑賞蓮のほとんどのは「鉢植え、盆池作り」で育成されています。品種は、花の色、花の大小、花弁数で次のように分類しています。白蓮系統(花弁全体が白の蓮)、紅蓮系統(花弁全体が紅の蓮)、黄蓮系統(花弁全体が黄の蓮)、爪紅蓮系統(花弁の先端や縁が紅色の蓮)　斑蓮系統(花弁に紅紫色の斑が入る蓮)、黄紅蓮系統(淡い黄色の花弁の先端や縁に紅が入る蓮)。大型種(花の直径が26cm以上の蓮)、普通種(花の直径が26cm以下の蓮)、小型種(普通種中花全体が小型のもの)、碗蓮(花の直径が10cm以下の蓮)。一重(花弁数が25枚以下)、半八重(花弁数が25～50枚のもの地)、八重(花弁数が50枚以上)。現在国内では約350種類の花蓮が育成されています。

表紙写真と文
三浦功大

1942年　宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文華史」(カど創房)などがある。

御法語に聞く

称名の時に心に思うべきようは、人の膝などをひきはたらかして、や、たすけ給えという定めなるべし。

【つねに仰せられける御詞】

お念仏を称える時、心に思うべきありさまは、例えていうなら、頼るべき人の膝に揺さぶりすがって「どうか、どうかお助けください」と懇願するようなものです。

喜びの心と感謝の心？　～凡夫の心は定まり難し～

去る三月、わが息子が幼稚園の卒園式を迎えました。少しぜん息気味で園を休みがちなわが子でした。緊張気味に園長先生から修了証を受け取り、精一杯口を大きく開き幼稚園の歌を唱えているわが子の姿を見つめながら、あっという間に過ぎ去った二年間の思い出が脳裏をよぎり、目にあついものがこみ上げてきました。喜びとも感謝とも表現し難い心です。親バカそのもの、至福のひとときでした。この拙文が読まれる頃は、わが子はピカピカの一年生となっていることでしょう。そして、また六年間、さまざまな出来事がわが子の周囲におこり、その都度、わが心も喜怒哀楽に揺れ続けることでありましょう。

同じ三月、「浄土教祖師方のおもかげ」と題するシンポジウムが東京芝の大本山増上寺で催されました。法然上人の他力の教えは十五流とも二十四流ともいわれる多くの流れに分派していきました。もちろん、いずれの派の祖師方も、法然上人こそわが師であると讃えられました。上人の教えの広大さを物語ってくれます。その中、現

在まで続く流れが、聖光上人を二祖とする浄土宗、證空上人を派祖とする浄土宗西山派、親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗、一遍上人を宗祖とする時宗の流れです。このシンポジウムは、各祖師方の法然上人への思慕とそのおもかげを知っていただくための催しで、司会として私もお手伝いいたしました。場内いっぱい、二百名近くの聴衆が熱心に耳を傾けて下さいました。

ところで、口頭ではさまざまな場で申しているのですが、祖師方の教えを学ぶにつけ、以前から感じ続けていることを正直に告白いたしましょう。司会という立場上、先のシンポジウムではさすがに言い出せなかったことですが。

わが国に伝えられた法然上人の浄土教の流れを、いつも私は大きく二つに分けてお話しします。前者が「(どうぞこの私をお救い下さいとの心で称える)お念仏が大事」という浄土宗の流れ、後者が「この私を救って下さるという喜びや感謝の心(で称えるお念仏)が大事」という浄土宗西山派・浄土真宗・時宗の流れです。なるほど、

さまざまなご法語を通じて法然上人が喜びや感謝の心の大切さをお示し下さったように、後者の流れも法然上人の教えであることに疑いの余地はありません。そして、ともすると後者の流れの方がよりスマートに感じられてしまうようです。そんなことから、しばしば後者の流れから前者の流れに対し「不徹底だ！半自力半他力だ！」などと批判が加えられました。はたしてそうした批判はあたっているのでしょうか。もちろんこんな私でさえ、喜びや感謝の心で涙を流しながらお念仏を称えた経験は一度ならずあります。けれど、そこは凡夫のはかなさ、そうした心は決して長続きせず、喜怒哀楽に揺れる日暮らしに逆戻りしてしまう私がいるのです。法然上人は、私のような弱く愚かな者のために「ただ一向に念仏すべし」とお念仏を生涯手放さないようにとお示し下さったのです。私は、前者のわが浄土宗の流れの中にこそ、心優しい法然上人のより深く徹底した人間洞察と、後者の流れをも包み込む大いなる他力の救いを見いだすことができるのです。

（大正大学非常勤講師　林田康順）

東海道五十三次を歩いて（二）

老いてなお
童の気持ちを持った仲間
四人で東海道を
歩きだした

原田 功

4、庶民の歴史の痕跡

旧東海道を歩くと日本の歴史の痕跡にいたる所で出会う。特に私達の心を引いたのは、歴史を動かした人物にかかわる史蹟よりも、普通の人間の思いや暮らしぶりが伝わってくるような歴史の痕跡である。名もない庶民の生きた証が見られる所であった。

そのような歴史は学校ではあまり習わない。そしてそのような小さな歴史はどんどん忘れ去られ、消えていく。旧東海道を歩いて、現在の自分に繋がっている庶民の歴史・日本人の歴史を少しでも考えることができたのは大きな収穫だった。

○泪橋

品川の宿を過ぎて勝島運河にそって、どこか海の匂いのする旧東海道を歩いていくと、浜川橋という小さな橋がある。その橋の別名を「泪橋」という。

橋のたもとに小さな説明板があって、泪橋の由来を次のように説明している。

慶安四年（一六五一）に鈴が森に刑場が設けられ、ここで処刑される罪人は裸馬に乗せられて江戸府内から刑場に護送されてきました。この時親族等がひそかに見送りにきて、この橋で共に涙を流しながら別れたということから、「泪橋」と呼ばれるようになりました。

鈴が森刑場で処刑された人は何人になるのだろうか。火付け、人殺し、謀叛、掟破り、政治犯、冤罪等々、時の為政者や社会道徳にそわなかった人々がそれぞれの思いを残して殺されていった。公然と殺人が行なわれた場所なのである。

罪人たちは、死ぬことを明確に意識してこの橋を渡ったのであろうか。おそらく、思いもしない突然の出来事のように感じ、何が何だか分からなかったに違いない。死ぬことは解っていても、納得できるものではないと思

浜川橋（泪橋）

う。

この橋の先の刑場には親族は行くことが出来なかったのであろう。裸馬に乗せられて行く親、子、兄弟、夫、妻などを悲痛な思いで見送るしかなかった。見送る人にはこの橋があの世とこの世の境のように思われたかもしれない。

永遠の別れをこの橋で交わした人々の涙を、今私たちはどのように理解したらよいのだろうか。私には理解できるような洞察力もないし、達観もしていない。ただただ不条理に思える。橋の下の黒い流れはこの不条理をどろどろと包み込んで流れているように思えた。

泪橋を渡ると、程なく鈴が森刑場跡があった。前の道は国道15号線であり、羽田に通じる道の入り口にもなっていて交通の要衝である。昔の事は一切構わず、時を切り裂くように大小の車が縦横に行き交う。

小さな公園のようになっている刑場跡の一隅に「南無妙法蓮華経」の髭題目の大きな碑が立っている。はしなくも髭題目が当時の人々が感じた世の無常や非情を辛うじて訴えているようでもある。

○投げ込み塚

保土ヶ谷の宿場跡を過ぎて国道1号線を2キロ程行くと権太坂という所がある。箱根駅伝ではこの坂が一つの難所で勝負どころでもあるようだ。しかし今の権太坂は山を切り通しにして国道を造ったので、だらだら坂でたいした坂ではない。

私たちは旧東海道の権太坂を越えるべく、国道から分かれて住宅の間を抜けて高台の小学校の前を通り更に登って、尾根道に出た。そこが権太坂であった。なるほど急坂である。草臥れて一服。尾根の反対側は高校らしく、グランドで野球をやっているのが見下ろせる。道はまだ上り坂でさすがに住宅はなくなって丘陵の畑となり、眺望が開けた。ここが権太坂の最高点でこれから行く戸塚方面の家並み

権太坂頂点より戸塚方面

やビルそして彼方に海が見渡せる。昔の旅人もこの辺で休憩したことであろう。これから行く戸塚あるいは保土ヶ谷の方を見下ろしながら、さまざまな思いに耽ったに違いない。

戸塚に向って坂を下れば再び住宅地になり、左側に「投げ込み塚」の碑がある。昭和36年この辺が住宅開発された時、人の骨が何体も出てきたという。この権太坂で疲れ果てて亡くなった人が何人もあったのだ。その遺体を投げ込んだ所である。

昔はこの権太坂は家もなく淋しい山道だった。こんな所で、旅の中途で誰にも看取られずに死んでしまう事ほど無念な事はあるまい。そして近くに住む人も、通りかかった人も、死んだ人を可哀相だと思いながらもどうすることも出来なかったのだ。投げ込み塚に遺体を運びながら、明日は我が身と思ったかもしれない。人の命ははかなく、生きるということは寂しいことだった。

投げ込み塚に向って、無名の先祖達を思い、

永勝寺　小松屋源蔵と飯盛女の墓

合掌する。

○遊女の墓

藤沢は大山参りの人々が江ノ島・金沢八景を回って江戸に帰るコースの宿場にもなっていたので、旅篭屋も賑わっていた所である。その中の一つ「小松屋」は街道の左側今の郵便局の隣にあった。いまは「チャイ夢」という喫茶店になっていて、旅篭屋だった事を偲ばせるものは全くない。

小松屋には数人の飯売り女がいた。飯売り女というのは貧しい農村などから売られてきた娘であって、売春もやらされていた。犬畜生のように酷使され、たいていは短命であり、死ねば墓もたてられずに犬や猫と同じように捨てられたのだそうである。小松屋の主人小松屋源蔵は自分の所で亡くなった飯売り女は葬式を出し、永勝寺に墓をたてて葬った。

その墓が永勝寺に今もあるというので、訪ねることにした。山門を入ったすぐ左側にその墓はあった。真ん中正面に大きな小松屋源蔵の墓、まわりにかしずくように小さな墓が二十個ぐらい並んでいる。それらが飯売り女の墓であるという。一つ一つに戒名らしい文字も残っている。このように丁重に葬られた飯売り女は幸せな方だったとはいえ、生きているときの悲哀が小さい墓から聞こえてくるような気がする。

もう一つ遊女の墓が有るところがある。御油である。

広重の絵では御油は留め女が強引に旅人を引き込もうとしている情景が描かれている。この絵のように御油は飯盛り女も多い所だったという。ここは戦災にも遭わず、国道からも外れているので、江戸時代とほとんど変わらない町並みが残っている。本陣跡の向い側あたりに元遊女屋だったという家がある。現在は味噌醤油を造っている。ここで明治10年に遊女五人が自殺したという。

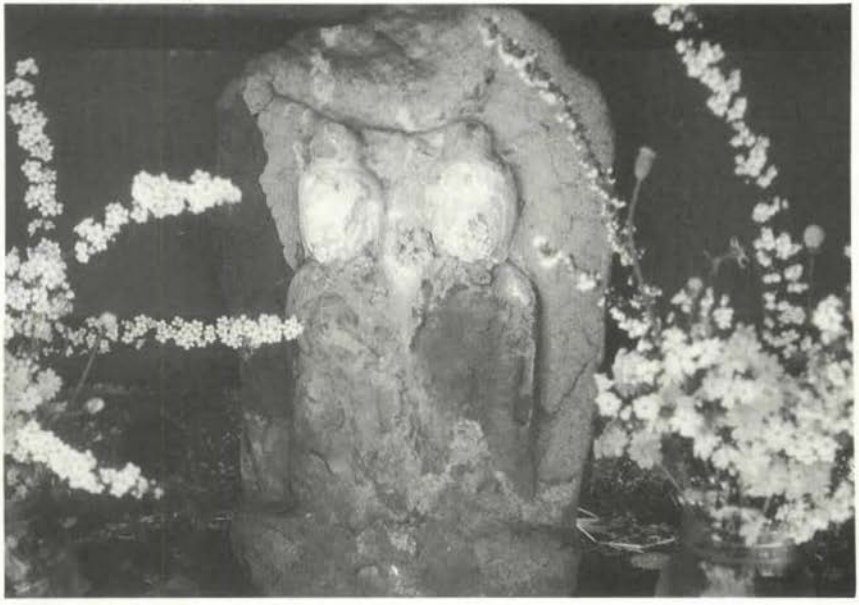
東海林というお寺にその遊女達の墓がある。小さい墓が五つ、寂しそうに並んでいた。逃げて帰ることも出来ず、苦しくつらい一生だったに違いない。人が人として扱われない世の中がついこの前まであったのだ。明治になってからの事であるから、そんなに遠い昔ではない。戦前までは遊女屋は日本の国至る所にあった。私の育った岩手県の海岸の小さな町にも思いあたる所があった。その家には肩まで白粉をぬった女が出入りしていた。私たち子供は「おしゃらぐ」などと言って、はやしたてていたことを思いだした。

○おしゃれ地蔵

藤沢の宿を過ぎ、小田急藤沢本町駅の上を通りやがて引地川を渡る。そこから間もなく右カーブする大きな坂道がある。

汗を拭きながら坂を上っていくと、歩道の左側脇に、目立たないがおもしろいものがあった。「おしゃれ地蔵」と呼ばれる双体の道祖

おしゃれ地蔵（四ツ谷立場）



神である。そばに教育委員会の小さな説明板があった。もう少しで見落とすところだった。

「女性の願い事なら何でもかなえてくださり、満願のあかつきには、白粉を塗ってお礼をする。」と伝えられており、今でも白粉が絶えることがないという。そのような話から、誰ともなく「おしゃれ地蔵」と名付けたとされる。形態的には、「地蔵」ではなく、道祖神(双体道祖神)の表現が妥当と考えられるが、土地の言い伝えを大切にしていきたい。

と書かれている。

なるほど顔が真っ白である。紅まで塗ってあって本当にお化粧をしている。願いが叶って美人にでもなった人がいるのだろうか。それともいい恋人とめぐりあわせたのだろうか。真新しい花も飾ってあるから、連綿と今でも女性に信仰されていることが歴然と解る。今も昔も夢見る女性は多い。

このようなものを見ていると時は移っても人の心は同じなのだと思う。庶民の優しい気持ちが伝わってきて、ほのぼのとする。

○小夜の中山

小夜の中山という所は淋しい所だろうと想像していたが、意外に明るい台地である。道の両側はすべて茶畑になっているから、後世になって開拓されて今のようになったのだろう。昔は、木が鬱蒼と生い茂り、強盗追剝ぎなども出没するような恐ろしい所だったようだ。

雲ひとつない麗らかな秋晴れ。全山茶畑であるから、見晴らしもよい。緩やかな坂をのんびりと登る。峠の頂上に着いても、広い所で、登り切ったという感じがない。そこに久延寺というお寺があった。このお寺の境内に「夜泣き石」という直径一メートル程のまんまるい石がある。この石はこの峠の少し先の道の真ん中にあったのだそうだ。この石には次のような話がある。

おしゃれ地蔵（四ツ谷立場）

この峠を通りかかった身重の女が盗賊に教われて死んだ。お腹の子供は生きて生まれた。久延寺のお坊さんがその子を水飴でそだてた。女の怨念は石にこもり夜な夜な泣く声が聞こえたという。

お寺からすこし行った所に茶店があり、その子育て飴を売っている。茶店の店番をしている人が、川島ちとせさんという百歳になるお婆さんである。てきぱきと慣れた手つきで物を売り、話も確かである。割り木に巻き付けた水飴を買う。飴色をしているが甘さはあまりなく、あまりおいしくはなかったが、これが本当の飴なのだろう。両側に10軒程の家があるが、住んでいる人はみんな年寄りである。しかもいずれも健康そうで幸せそうな顔をしている。人里はなれた峠で、欲もなく質素な暮らしをしているからだと思う。このお年寄りたちの姿こそ生きた遺跡だと思った。

峠を過ぎ長い緩やかな坂を下る。茶畑はまだ続く。やがて尾根が少し細くなり、広重の描いた「日坂・小夜の中山」の場所に着く。ここに夜泣き石があったのである。ここでも広重は坂などを強調して描いている。今よりも淋しいところだった事がよく解る。夜な夜な女の泣く声が聞こえてくるような陰惨な雰囲気はないが、昔の人の旅のつらさ、恐ろしさを想像しながら日坂への坂を下った。

（元公立小学校校長）

小夜の中山　夜泣き石跡

Q&A

読者の疑問に
大室了晧師が答えます

仏教相談

Q

家が絶えてしまう。お墓はどうなるの？

私は今年七十八歳になります。

家族は息子夫婦と孫娘が一人。夫は十年前に亡くなっています。

実は、この秋に孫娘が結婚します。一人娘故、養子を望んでいたのですが、相手も一人っ子ということで、それも叶いません。私は嫁に行ってしまったら、家が絶えてしまう、と、結婚に反対をしていたのですが、息子夫婦や孫娘は、「もう、そんな時代じゃない」と言うのです。

でも一人しかいないわが家の孫が外に出てしまったら、わが家は絶えてしまいます。私は、それがご先祖、そして亡き夫に申し訳なくてなりません。

そしてまた、息子夫婦がいる間はまだいいのですが、私が死に、息子夫婦が死んでしまったら、だれがお墓を守るのでしょう。心配でなりません。

現代は少子化でこういうケースも多いと聞きますが、どうしたら一番よいのでしょうか。

A

ご心配されていることは、

一、家系が絶えること

孫娘さんが結婚して他家へ嫁ぐことになったので、家が絶えてしまうことは、代々家系を継いでこられたご先祖や、亡くなられたご主人に申し訳ない。どうしたら良いか。

お答

私の寺の檀家にも似たような家があります。一人娘が嫁いで行くことになりました。心配して後の事を相談に見えました。

その結果は、相手が次男であった事もありまして、男の子が生まれたら、その子に名籍を継がせよう。

つまり嫁に行く娘の子、自分たちの孫に家を継がせようということです。

先々の事など分からない、という不安がありましたが、結婚を控えた娘の幸せを考えるのが、いまの家族にとって一番大事なことだという結論に落ちつきました。

孫が生まれました。幸い男の子でした。

数年たって、母親の実家の名籍を継ぎ、家系の心配はなくなりました。

ところが、一男誕生の後は子宝に恵まれません。二十年ほどたってから娘夫婦は後の事に悩みましたが、主人が次男ですので自分たちの家は自分たちだけでも良い。出来れば孫に託そうと割り切りました。

二、あなたの息子さんご夫婦が亡くなった後は、誰がお墓を守ってくれるのだろうか。

お答

檀家にも同じような例がありますので、ご紹介しましょう。

やはり一人娘が他家へ嫁ぎました。

数年して母親が亡くなり、七十歳過ぎの父親が残りました。

しかも病がちの父でしたので、一人にしておくことは忍びがたく、マンションを引き払い娘夫婦は娘の実家に移り住み、病身の父親の面倒を看ることになりました。

数年して父親は亡くなりました。

遺骨は、先年亡くなった母親が納まっている、娘の実家の先祖代々のお墓に納骨しました。

ここまでは当然の事として取り運びましたが、これからが問題でした。

娘は私がお墓を守ると言いましたが、その先はどうするかという問題なのです。

いろいろ考えた末に相談に来て私に聞きました。「娘の実家の墓を、受け継いでも良いか」と。

私と話し合った末に、次のようにして以来二十年過ぎました。

「○○家之墓」とあった「○○」を夫の姓の「◎◎」に刻み直しました。

そして石塔の側面に「○○家代々の墓」と刻むように助言して、この墓の歴史が何時までも残るようにしました。

現在は娘夫婦が成長した息子等を連れて墓参りに来ています。

以上は家が絶えることもなく、またお墓の後継ぎも出来た例ですが、子供が一人でしかも独身、または他家へ嫁ぎ実家の墓は守らないという場合はどうしたら良いか、というご心配がお有りと思います。

お答

私の寺にもそのような檀家がありますので、ご参考にして頂けたらと思います。

永代供養。ご当人が亡くなったあと、寺が責任を持ってご供養をしてさしあげることです。頼みになる親戚がない時には、住職が喪主となって葬儀など一切を執り行い、後々までご供養をします。

永代とはいっても、ご相談して十三回忌あるいは最も長期で三十七回忌までとし、文書を取り交わして間違いのないようにします。

また永代を依頼すること、その内容をしっかりと遺言に残しておくようにと固く申しあげています。

仏教歳時記

風薫る五月。気持ちのいい季節がやってきます。五日、端午の節句は男子の節句です。

兄と読む一つ絵本や端午の日　高田風人子

小子化、非婚の時代です。だんだんこんな風景も見られなくなっていくのでしょうね。

五日は薬狩、薬の日などといって野山へ出て薬用とする草根木皮などを採取する日でもありました。

杣に聞き図鑑に照らし薬狩　久永雁水荘

ピクニックがてら一日、野山を探してみるのも楽しそうですね。さて第二日曜日は母の日。元来はアメリカ生まれのキリスト教系行事でした。日本では昭和六年にでき、当初、皇后誕生日をそれにあてたのです。第二日曜日としたのは戦後のこと。

母の日の母のこまかき柄を撰る　桂信子

風薫る

かぜかおる

しみじみとする五月。今度は柏餅と父の句をひとつ。

父の忌の売り切れてゐし柏餅　沢木欣一

母に対する緻密な思いとは変わって父ってやはり少し寂しいものですね。けれど孝養は尽きぬもの。思い出してあげたいそれぞれの顔があります。青葉若葉の新しい命、懐かしい追憶の似合う五月。

京都一千年の歴史に
育まれた巧みの技
京仏壇・佛具は当店に!!

〒六一五―〇八八四
京都市右京区西京極郡町一〇三番地三
(株)島津法衣佛具店
☎〇七五―三一四―七七六八
FAX〇七五―三一五―三七五三

P.53の答①コイノボリのヒゲ②コイノボリの尾③イカの耳④中央の雲⑤ビルの中の人の右手⑥家の窓⑦カンバンの長さ

浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●風光る

雑踏に母のそら似や風光る

横田麻衣

●街の雑踏の中にふと母を見つけた。確かに母と思ったのだが、すぐ別人と気づく。こういう経験は誰にもあることである。「なあんだ」と思う気持ちに、「風光る」がうまく働いている。

名にし負ふ東京大仏風光る　関口光樵

発心の笈摺りの背に風光る　佐藤雅子

灯台の岬はるかや風光る　藤本順子

●蝶

蝶の舞ふ病院の庭シーツ干す

千崎千春

●病院の中庭だろうか。いろいろの気や草花が植えてある。その一隅に物干場がしつらえてあるのだろう。患者のシーツを干しながら

増田河郎子・選

花を舞う蝶に目を遊ばせる。こういう時がしばらくの目の保養でもある。

初蝶や山また山の日溜りに　河合冨美枝

蝶の昼仁王は力抜き給ふ　関口光樵

噴水の綾なす光もつれ蝶　石原　新

●自由題

入彼岸仏のいます数珠の穴

関口光樵

●彼岸の入り、墓参のために数珠を出す。珠の一つにレンズの付いた穴があって、のぞくと仏の姿が浮び出る。原句は「数珠孔に仏の座る入彼岸」だった。句を勝手に直さないようにしているが、これは許してほしい。

網の目に角荒々とさざえ売る　島谷ときを

芽起しの雨に湿りし回覧板　薗田郁子

公衆電話のともしびひとつ雪の原　小久保あきを

参加作品……編集部選

風光る

花粉飛ぶマスクで覆う風光る　上野明達
孟宗の竹の先より風光る　大場　清
風光るいかなご漁や播磨灘　中島一子
赤城嶺のちぎれ雲より風光る　中島富士子
取り逃す銀の鱗や風光る　河合冨美枝
風光る一湾の濤裏返り　河合冨美枝
風光る金寂光の鵠尾の照り　関口光樵
起伏する牧場深く風光る　嶋田喜代子
満願の僧のつむりや風光る　佐藤雅子
風光る頓挫となりし工事場に　佐藤雅子
満員のダンス教室風光る　松濤千鶴子
網籠の積まれし浜の風光る　増田信子
老僧の衣紫風光る　谷しげ子

蝶

蝶を追ふ蝶の飛びかふ香りかな　上野明達
初蝶やいま仏塔の頂に　大場　清
やはらかに飛翔のつづく春の蝶　中島富士子
蝶舞へりあやしき彩を日に交はし　河合冨美枝
己が身にまつわる法話蝶の昼　関口光樵
蝶の昼に仁王は力抜き給ふ　嶋田喜代子
花壇成る早々に蝶客と来し　佐藤雅子
蝶追って無為なる一日賜りぬ　佐藤雅子
囲児らの列を追いゆく蝶々かな　植田規夫
半島の尽きて遥かな島の蝶　松濤千鶴子
初蝶のあとよりきたる郵便夫　中村陽子
満間の黄花で遊ぶ白蝶々　瀬川浩子
蝶舞ふや手押し車の老の背ナ

自由題

母の忌や雛を飾りて写経せり　上野明達
春光の庭目覚めける気配あり　周東澄江
僧の振る籠松明や古都に春　中島一子
五線譜に残るむかしの雛の歌　河合冨美枝
菜種づゆ生き生きしてる農耕地　吉河章子
春眠を目ざめて夢を探しけり　嶋田喜代子
今生の今がしあわせ五重相伝を　川崎久子
いつの世も刃傷沙汰あり通い猫　佐藤雅子
出航の朝の息子にめかぶ汁　村上青女
一トふを海女がそだてし花葉畑　北川弘子
ものの芽の秘かにありし風荒ぶ　池田伊吹

第七回浄土誌上句会のお知らせ

季題

若葉
柏餅
自由題

締切・五月二十日
発表・『浄土』七月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各一名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-001　東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

ぱずる

まちがいさがし

答えは48ページにあります。

BOOK

心の痛みの癒し―高齢化社会への仏教的アプローチ―

福岡教区浄土宗青年会編

同朋舎出版　定価一、五〇〇円（税別）

福岡教区浄土宗青年会は、平成9年12月にシンポジウム心の痛みの癒しを開催し、この度その内容を中心とした本を出版いたしました。奈倉道隆先生（東海学園大学教授、医学博士）の基調講演をはじめ、藤本淨彦先生（佛教大学教授）等、より内容を充実させています。

福岡教区浄土宗青年会事務局では、１２６０円（税別・送料別但し20冊以上の場合送料無料）で販売いたしております。

申し込み・問い合せ先

〒830-0053福岡県久留米市藤山町１３２４-３　専修寺内

福岡教区浄土宗青年会事務局　辻村　弘道宛

ＴＥＬ　０９４２-２２-３４２８　ＦＡＸ　０９４２-２２-３５７０

編集後記

車椅子押して背中に風光る　岱潤

ボランティアをして初めてわかることは、させて頂くことが学習であり、喜びであり、自分自身のためであることである。光が指すのではなく、指していることに気がつくことができることだ。

アーユス＝仏教国際協力ネットワークという団体がある。今から六年前に東京の浄土宗青年会役員ＯＢを中心に設立された初々しい団体だ。

この団体では、当初より「光があたらないところに光をあてる運動」という着眼点を持ち、社会的弱者をケアする運動を中心にして、思想信条の枠を越えて活動を続けている。

光があたっていない部分に光をあてれば、今まで光があたっていた部分は当然ぼけることになり、その分反感をかうことになる。大局的に当然「善」と思われることも、今まで強い立場でいた者にとってみれば、おもしろくないことも多いのである。

そんな中でボランティアを続ける苦労、勇気は大変なものがあると思う。我々が光をあてたつもりが、実はそこから逆に光が放たれていることに気がつくことがある。そんな時が一番嬉しいときといえる。（長）

編集チーフ　長谷川岱潤
編集スタッフ　斎藤晃道
村田洋一
井原法正
佐山哲郎
問川彰道

編集顧問　大室了晧

浄土　六十五巻五月号　頒価六百円　年会費六千円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷――平成十一年四月二十五日
発行――平成十一年五月一日
発行人――真野龍海
編集人――宮林昭彦
印刷所――株式会社シーティーイー
〒一〇五-〇〇一一
東京都港区芝公園四-七-四明照会館内
発行所　法然上人鑽仰会
電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六
振替〇〇一八〇-八-八二一八七

住友海上

代理店

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。

ここにあるマークの意味、わかりますか？ 暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする

住友海上

〒104-8252東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

monthly JŌDO 1999・5 発行人／真野龍海 編集人／宮林昭彦 編集チーフ／長谷川岱潤

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは下記まで。

【水晶数珠】
電話：03-3759-7074
【布教額・選択集十六章之図】
電話：03-3578-6947
FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶数珠

水晶腕念珠

水晶数珠ブレスレッド

水晶腕念珠	①6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
	②6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
水晶数珠ブレスレッド	③6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
	④6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
	⑤8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
	⑥8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- 申し込からお届までおよそ3週間です。
- 送料は一個あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- 支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- 商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

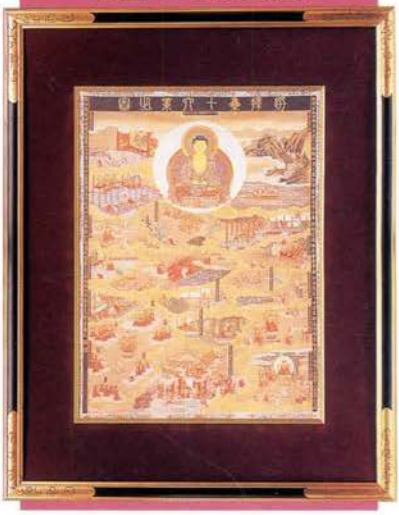
仏壇用宗旨布教額

家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183センチ)
735円(送料別)

小(273×142センチ)
420円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465センチ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)